



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	教養教育における心理学 教官はどのような意識を持って、何を、どのように教えているのか
Author(s)	道田, 泰司; 富永, 大介
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(50): 307-314
Issue Date	1997-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2956
Rights	

教養教育における心理学

— 教官はどのような意識を持って、何を、どのように教えているのか —

道田泰司・富永大介

Psychology in General Education—What, How, and with What Kind of Intention Do Instructors Teach in Psychology Classes? —

Yasushi Michita and Daisuke Tominaga

目 的

大学の教養教育（共通教育）課程において、「心理学」関連の授業は、どこの大学でも大変な人気を博している。たとえば琉球大学教養部では、心理学概論科目として、前期に「心の科学」、後期に「人間関係論」を、それぞれ7～8クラス提供している。どのクラスも100人～150人のクラスサイズであるが、毎年多くの受講希望者が殺到する。平成7年度延受講者数で言うと、人文社会系列の13学科目の中では、一番多くの受講生を集めている（理系学生の必修科目がある自然系列や、多くの学生が受講する英語では、もっと多数の学生が受講しているが）。その理由としては、高校までに存在しない科目だから、面白そうだから、などが挙げられるであろう。

心理学を専攻するごく一部の学生を除くと、多くの学生は、教職科目でも取らない限り、大学卒業まで（そしておそらく一生）、正式に心理学の講義を受講することはない。また大学入学以前に、正式に心理学の講義を受講する機会を持つ学生はほとんどいない。言ってみれば、彼らは教養教育として受講する半年から1年間が、おそらく一生に1度の正式な心理学との出会いの場になるわけである。ということは、教養教育における心理学担当教官は、そのことをきちんと認識した上で、適切な教育目標の元に、適切な教育方法を用いて、学生に伝えるべきことを適切に伝えることが重要であるように思われる。

現在のところ、大学の教養教育における心理学教育の在り方について論じられた論文はあまりないようである（そのような試みとしては例えば、

米谷(1995); 佐藤(1993); 吉村・吉村(1995)などが挙げられよう)。本報告では、大学の教養教育の中での心理学教育の位置づけやあり方を探るための基礎資料を得ることを目的とし、全国各大学の心理学担当教官の教育の現状や意識を明らかにするために、以下の2点を問う調査を行った。①授業を通して、「何を」教えたいと思っているか。②「どのように」（どんな点を重視して、どのような工夫をして）授業を行っているか。また、これらの質問項目に対する教官の意識が、教養教育に関わった年数や教官の年齢によって違いがあるかどうかとも検討した。

ところで、平成3年に大学審議会の答申「大学教育の改善について」がだされ、それをもとに現在日本中で戦後最大級とも言われる大学改革が進行中である。そこには、「大学設置基準の大綱化（自由化）」と並んで、「大学評価のシステム」の必要性が詠われている。ここで言われていることは、大学の教育研究活動の活性化を図り、質の向上を努めるために、不断の自己点検を行い、改善の努力を行っていくことの必要性である。通常これは、各大学や学部の単位で行われるものである。しかし、各大学各学部の教育研究活動に不断の自己点検と改善の努力が必要であるように、心理学という特定の学問分野においても、そこで教育されるべき内容や方法について、自己点検が必要なのではないだろうか。いわば、大学・学部・個々の教官の枠を超えた、「心理学教育の自己点検・評価」である。もちろん各教官がどのような教育目標を立て、どのような教育を展開していくかは各教官に独自のものである。しかし、心理学がどのように教育されているのかという現状把握

を通して、その中で各教官が自分自身の心理学教育をその中に位置づけることが可能であろうし、また、改善すべき点や評価すべき点、今後の方向などのヒントをここから得ることができるであろう。本報告は、教養における心理学教育の自己点検・評価の第1歩の試みともいうことができよう。

方 法

調査対象および手続き

調査用紙を、全国の国公立大学（短期大学を含む）の教養教育担当教官宛てに送付した。1校につき、3枚ずつ調査用紙を封入した。調査の実施期間は、1994年7月～8月であった。

送付先は、73校であった。そのうち、50校より返送があった（返送率68.5%）。ただし1校に複数枚調査用紙を送付しているのので、返送されてきた調査用紙は全部で74枚であった。

調査用紙の送付先大学は、次の3つの観点から選ばれた。

(1) 国立大学教養部35校。これは、1994年まで、毎年日本心理学会大会期間中に開かれていた、「国立大学教養教育（前期教育）担当教官懇談会」に、過去5年（1990年～1994年）の間に参加があった大学とした。35校の内、アンケートの返送があったのは24大学であった（返送率68.6%）。

(2) 筆者の出身大学である、広島大学教育学部の卒業生で、現在大学教官をしているものが所属する大学29校。主に筆者の知人が在籍する大学を選択した。29校の内、アンケートの返送があったのは19大学であった（返送率65.5%）。

(3) 上記の大学以外で、筆者の知人の所属する大学9校。9校の内、アンケートの返送があったのは7大学であった（返送率77.8%）。

調査用紙の構成

調査用紙は、以下の5つの質問からなっていた。

1. 教養科目として提供している心理学関連科目名（自由記述）。そのうちで、回答者が最も重視している科目名に丸をつけさせ、2番以降の質問項目は、その科目に関して回答してもらった。なお、最も重視する科目がない場合は、心理学概

論か、それに近い科目に関して回答してもらった。

2. 授業を通して、何を教えたいと思っているか。これは、19の選択肢を用意し、複数解答可で該当項目に丸をつけさせた（Table 2）。当てはまるものがない場合は、「その他」の欄に自由記述させた。この質問項目が、目的の①に相当する。

3. 授業のやり方として、どんな点を重視しているか。これは、21の選択肢を用意し、複数解答可で該当項目に丸をつけさせた（Table 3）。当てはまるものがない場合は、「その他」の欄に自由記述させた。この質問項目が、目的の②に相当する。

4. 質問項目2や3で回答したような授業をするために、どんな工夫をしているか。また、その工夫はどのくらい効果を挙げていると思うか（自由記述）。

5. 教養教育で「心理学」を教える必要があるか（ある・ないの2者択一）。また、そのように思う理由（自由記述）。

なお、本報告では取り上げるのは、上記5質問項目中、2番と3番のみとした。

調査用紙の末尾には、所属、氏名のほか、年齢、教養教育に関わった年数について記入させた。

結 果

回答者の年齢を、30代、40代、50代、60代の4つに分け、教育経験を5年以内、6～10年、11～15年、16～20年、21～25年、26～30年の6つに分けてクロス集計した（Table 1）。その結果、年齢と教育経験には大きなばらつきが認められなかったので、分析には、年齢のみを使用することにした。ただし50代と60代は、30代や40代に比べて人数が少なかったために、両者を込みにし、50～60代として扱った。

質問項目2（何を教えるか）と質問項目3（何を重視するか）を、全体の選択率、世代別の選択率の差、クラスター分析によるタイプ分け、の3つの観点から分析を行った。

Table 1 世代と教育年数のクロス集計

	教 育 経 験 (年)						計
	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	
30代	14	9	0	0	0	0	23
40代	3	7	12	8	0	0	30
50代	0	0	3	6	4	2	15
60代	1	2	0	0	0	3	6
計	18	18	15	14	4	5	74

(数字は人数)

全体の選択率

質問項目 2 (19選択肢) と質問項目 3 (21選択肢) の計40選択肢の選択者数は、0人から62人まで分布しており、平均選択者数は16.2人(21.9%)であった。

ここでは便宜上、37人(50%)以上に選択されたものを高選択率のもの、2人(3%)以下の

ものを低選択率のものとする。

質問項目 2 (Table 2)において選択率が高かったものは、「心理学の基礎知識」「心理学的なものの見方や考え方」の2つであった。選択率が低かったのは、「大切なことはタームを覚えることではない」「高度な専門的知識」「人の心の単純さ」「常識」の4つであった。

Table 2 質問項目 2 (何を教えるか) の集計および検定結果

選 択 肢	全 体	選 択 率		
		30代	40代	50-60代
1. 心理学の基礎知識	50.0	+ 30.4	60.0	57.1
2. 高度な専門的知識	2.7	0.0	6.7	0.0
3. 心理学に対する幻想を打ち砕く	16.2	13.0	13.3	23.8
4. 教官の人生観や生き方	4.1	4.3	3.3	4.8
5. 心理学的なものの見方や考え方	81.1	78.3	80.0	85.7
6. 自分で考える力	23.0	34.8	23.3	9.5
7. 人のこころの複雑さ	20.3	13.0	26.7	19.0
8. 人のこころの単純さ	2.7	4.3	3.3	0.0
9. 日常生活での現象の説明	37.8	* 39.1	53.3	+ 14.3
10. 大切なことはタームを覚えることではない	2.7	4.3	3.3	0.0
11. 常識	2.7	4.3	0.0	4.8
12. 常識を疑うこと	18.9	34.8	20.0	0.0
13. 心理学研究のおもしろいところ	40.5	34.8	50.0	33.3
14. 自分の意見・価値観を大切にすること	10.8	13.0	10.0	9.5
15. 他人の意見・価値観を尊重すること	10.8	13.0	10.0	9.5
16. 多数の意見・価値観に流されないこと	4.1	0.0	6.7	4.8
17. なぜだろうと思う気持ち(好奇心)	41.9	56.5	40.0	28.6
18. 学問とは何か(心理学に限らず)	17.6	17.4	16.7	19.0
19. 何が主観で何が客観か	4.1	4.3	6.7	0.0

注：世代別選択率の前に付いている記号は、 χ^2 検定の結果を表す(*が $p < .05$, +が $p < .10$)。各世代の後に付いている符号は、残差分析により、選択率が高いもの(+), 低いもの(-)を表す。

Table 3 質問項目3 (何を重視するか) についての集計および検定結果

選 択 肢	選 択 率			
	全 体	30 代	40 代	50-60代
1. 内容の正確さ (詳しさ)	27.0	* 13.0	43.3 +	19.0
2. わかりやすさ	83.8	82.6	83.3	85.7
3. 面白さ	55.4	65.2	53.3	47.6
4. 声の聞き取りやすさ	6.8	8.7	6.7	4.8
5. 深み	6.8	8.7	6.7	4.8
6. ていねいさ	6.8	4.3	6.7	9.5
7. ポイントを絞ること	24.3	21.7	26.7	23.8
8. できるだけ自分で考えさせる	24.3	39.1	20.0	14.3
9. 学生がノートを取りやすいような板書	9.5	13.0	3.3	14.3
10. 出席点	4.1	0.0	0.0	14.3
11. 講義にメリハリをつける	16.2	13.0	20.0	14.3
12. 体験による納得 (実験、調査)	29.7	21.7	43.3	19.0
13. 導入部分の重視	10.8	8.7	10.0	14.3
14. 学生の疑問や質問	9.5	13.0	10.0	4.8
15. 体系的な流れを作る	24.3	13.0	26.7	33.3
16. 学生に感動体験を与える	8.1	17.4	6.7	0.0
17. 実生活との関連づけ	40.5	* 56.5 +	43.3	19.0
18. 講義中の学生とのコミュニケーション	16.2	* 30.4 +	6.7	14.3
19. 教官の人柄の親しみやすさ	1.4	0.0	0.0	4.8
20. 授業準備になるべく手間をかけないこと	0.0	0.0	0.0	0.0
21. 授業内容や進行の奇抜さ	5.4	13.0	3.3	0.0

注：世代別選択率の前に付いている記号は、 χ^2 検定の結果を表す (*が $p<.05$, +が $p<.10$)。各世代の後に付いている符号は、残差分析により、選択率が高いもの(+)、低いもの(-)を表す。

質問項目3 (Table 3)において選択率が高かったものは、「わかりやすさ」「面白さ」の2つであり、選択率が低かったものは、「教官の人柄の親しみやすさ」「準備の手抜き」であった。

世代別の選択率

74人分の回答を、30代 (23人)、40代 (30人)、50~60代 (21人) の3カテゴリーに分け、世代別に選択率を算出した。質問項目2 (Table 2) に関して χ^2 乗検定を行ったところ、傾向差を含む有意差がみられたものは、「心理学の基礎知識」($\chi^2(2)=5.15, p<.10$)、「日常生活での現象の説明」($\chi^2(2)=8.03, p<.05$)であった。質問項目3 (Table 3) において、傾向差を含み有意であったものは、「内容の正確さ (詳しさ)」($\chi^2(2)=7.00, p<.05$)、「実生活との関連」($\chi^2(2)=$

6.56, $p<.05$)、「学生とのコミュニケーション」($\chi^2(2)=5.49, p<.10$)の3つであった。

これらの選択肢について、どのカテゴリー間に差があるかを明らかにするために、残差分析を行った (Table 2, Table 3)。これに基づき、各世代の講義の違いを記述すると次のようになろう。30代の教官は、教える内容としては、常識を疑うことは重視し、心理学の基礎知識は重視しない。その際には、実生活と関連づけることや、学生とのコミュニケーションを取ることを重視する。40代では、教える内容としては、日常での現象を説明することを重視される。その際には、内容が正確で詳しいことは重視されるが、学生とのコミュニケーションをはかることは重視されない。50代は、教える内容としては、日常での現象を説明

することや常識を疑うことは重視されず、また、教える際には、実生活と関連づけることは重視されない。

クラスター分析による回答のタイプ分け

質問項目2の19の選択肢から2つずつを取り出すと、171のペアができる。その各ペアに対して、同一の回答者が一致して選択または非選択している人数を数え上げた。74からその数を引

いたもの（すなわち2選択肢の間での、選択の「不一致」の人数）を、選択肢間の距離行列とし、クラスター分析を行った。つまり、距離が小さいということは、2選択肢間で一致している人数が多いということであり、距離が大きいということは、一致している人数が少ないということである。質問項目3の21項目に関しても、同様の分析を行った。

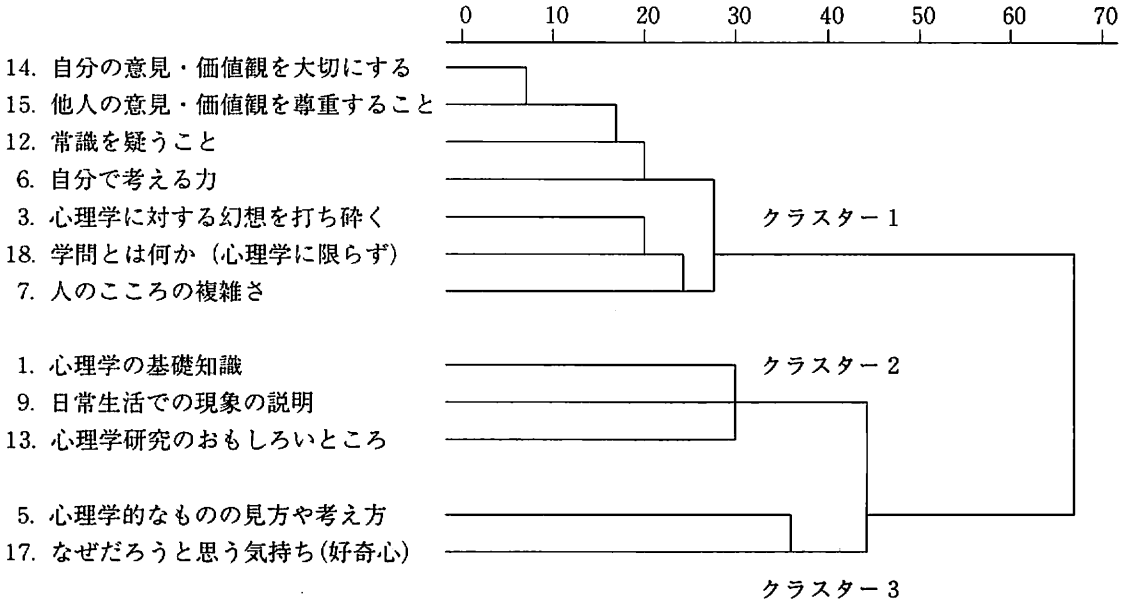


Fig.1 質問項目2のデンドログラム

質問項目2に関して、ウォード法によってクラスター化したものがFig.1である。これによると、19選択肢中12個が、距離66.86のところまでまとまっている。距離37.0のところまで3クラスターに分けると、クラスター1は、「自分の意見、価値観を大切にする」「他人の意見、価値観を尊重する」「常識を疑う」「自分で考える力」「心理学に対する幻想を打ち砕く」「学問とは何か」「人の心の複雑さ」の7選択肢が含まれる。クラスター2には、「心理学の基礎知識」「日常生活での現象の説明」「心理学研究の面白いところ」の3選択肢、クラスター3には、「心理学的なもの（見方や考え方）」「なぜだろうと思う気持ち（好奇心）」の2選択肢が含まれる。これらをまとめると、クラスター1は「自主的に、

幅広くものを考える力」の教育、クラスター2は「心理学の知識」の教育、クラスター3は「ものを見る目」の教育、といえるだろうか。

質問項目3に関して、同様に分析を行った（Fig.2）。これによると、21選択肢中11個が、距離66.22のところまでまとまっている。距離38.58のところまで3クラスターに分けると、クラスター1は、「実生活との関連づけ」「講義中の学生とのコミュニケーション」「体験による納得（実験、調査）」「できるだけ自分で考えさせる」の4選択肢が含まれる。クラスター2は、「講義にメリハリ」「導入部分の重視」「ポイントを絞る」「体系的な流れ」「内容の正確さ（詳しさ）」の5選択肢が含まれる。クラスター3は、「わかりやすさ」「面白さ」の2選択肢が含まれる。これ

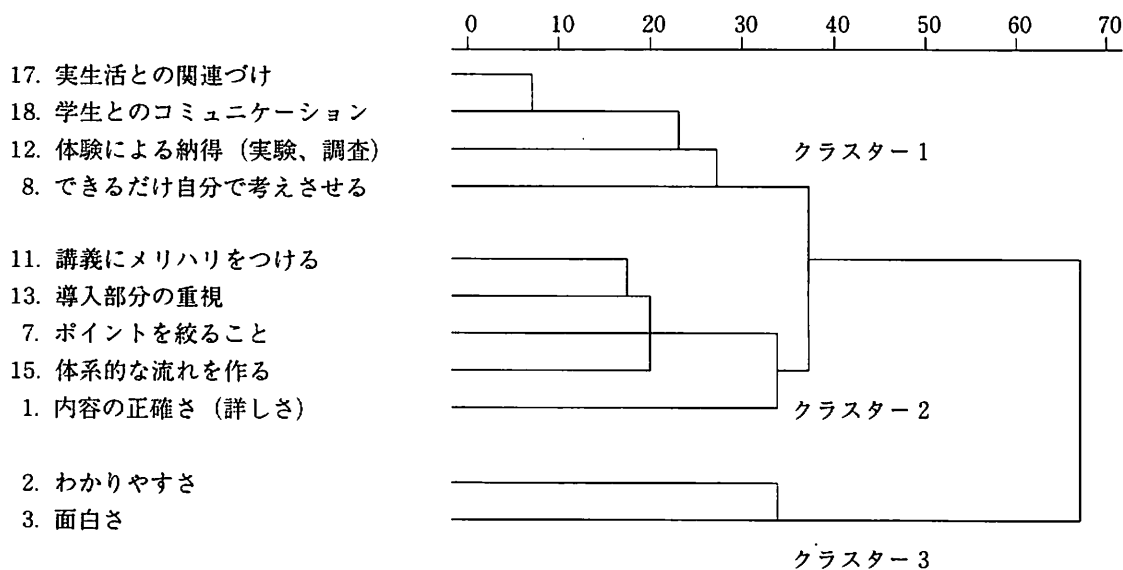


Fig.2 質問項目3のデンドログラム

らをまとめると、クラスター1は「学生に参加・思考させるための工夫」、クラスター2は、「講義内容をきちんと伝えるための教官側の工夫」、クラスター3は、「一般的なよい授業の概念」といえるだろうか。

考 察

本報告は、全国各大学の心理学担当教官が授業を通して、何を、どのように教えたいと思っているのか、また、教官の意識が、教養教育に関わった年数や教官の年齢によって違いがあるかどうかを検討することが目的であった。

まず、何を教えたいか、という教育目標に関する全体的な傾向としては、「心理学の基礎知識」と「心理学的なものの見方や考え方を」を教育目標としている教官が半数以上である、という結果であった。またクラスター分析の結果から、心理学教官の教育目標は、「自主的に、幅広くものを考える力」「心理学の知識」「ものを見る目」の3つに大きく分けられることが明らかとなった。

平成3年2月に出された大学審議会答申「大学教育の改善について」の中では、一般教育の理念・

目標が次のようにうたわれている。「一般教育の理念・目標は、大学の教育が専門的な知識の修得だけにとどまることのないように、学生に学問を通じ、広い知識を身につけさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うことにあり、入学してくる学生や諸科学の発展の現状から見て、このような理念・目標を実現することが一層必要となっている」。この中に見られるように、一般教育の理念・目標は大きく3つに大別して考えると考えやすいのではないだろうか。すなわち、①広い知識の修得、②ものを見る目の養成、③自主的・総合的に考える力の養成、である。

クラスター分析によって得られた3クラスターは、ちょうどこれに対応するものとして考えることができるであろう。すなわち、クラスター1の「自主的に、幅広くものを考える力」が大学審議会答申の③「自主的・総合的に考える力の養成」、クラスター2の「心理学の知識」が答申の①「広い知識の修得」、クラスター3の「ものを見る目」が答申②「ものを見る目の養成」、という対応である。

ここで興味深いのは、クラスター2「心理学の

知識」(広い知識の修得)に含まれる2選択肢に、世代差が見られることである。すなわち、「心理学の基礎知識」は30代で比較的重視されていない(40代以上の約半分)。一方、「日常での現象の説明」が、50代以上で軽視、40代で重視されている。この世代差は何に由来するのだろうか。本調査ではそこまで明らかにすることはできないが、年齢や教育経験の差、あるいは、育ってきた時代背景の違い、として考えられるかも知れない。

年齢や教育経験の差の部分に関しては、現在の若手教官も、年齢を経ることによって同様に変化していく、と想定される。それは例えば、年齢を積むことによって心理学(心理学教育)についての知識も蓄積されていけようし、また、長年学生と接したり、学生を相手に教育をする経験を積むことによって変化していく部分もあるであろう。

一方、育ってきた時代背景に関しては、今後もしばらく変化していかない部分であろう。過去40年の大学等への進学率(当該年度の大学・短期大学入学者数および高等専門学校4年次進学者数÷3年前の中学高卒業者数×100)の推移を大まかに見てみると、1960年が10.3%、1970年が24.0%、1980年が37.9%、1990年が36.8%、そして1995年が45.8%となっている(文部省、1996)。30代教官が学生の頃と、50代教官が学生の頃では、大学進学率が4倍近く違うわけであり、おのずと、学生時代に受けた大学教育の在り方、あるいは、教官として若い頃に形成した大学教育に対するイメージは、時代背景によって大きく違っていることは十分に考えられよう。ちなみに、大学教育(高等教育)の質は、大学進学率(在籍率)15%程度を境に、エリート段階からマス段階へと移行するという説もあり(天野、1995)、時代によって大学教育の質に違いがあること、またそこから、受けた教育の違いにより、大学教育に対する考え方に世代差がありうることは十分に考えられることと思われる。

次に、どのような点を重視して教えるか、という教育方法に関してであるが、全体的な傾向としては、「わかりやすく」「面白く」講義をすることを心がけている教官が半数以上であった。クラスター分析の結果を見ると、この2つは1クラスターとしてまとまっていた(クラスター3の「一

般的なよい授業の概念」)。これらはいかなれば、非常に漠然とした一般的なよい授業を指した言葉であり、その中身をより具体的に明示したのが、残りの2クラスター(「学生に参加・思考させるための工夫」「講義内容をきちんと伝えるための教官側の工夫」といえるのではなからうか。

ここでも興味深いのが、世代別の選択率の差である。クラスター1に属する、「実生活との関連づけ」「講義中の学生とのコミュニケーション」が、30代教官で重視されているのに対し、クラスター2に属する「内容の正確さ」は逆に30代教官に軽視されている。このように、同じ「分かりやすくするための工夫」でも、世代によって使われる方法が違っているようである。すなわち30代教官は、学生に参加・思考させることに重点を置くことによって理解を促そうとしているのに対して、40代以上の教官は、講義内容をきちんと正確に伝えることに重点を置くことによって、理解を促そうとしているようである。

さて、本報告では「教養教育における心理学の自己点検」の一助として、全国各大学の各教官の意識についてまとめたわけであるが、本報告はどのように意義づけることが可能であろうか。一つには、各教官が、他教官(特に他世代の教官)の教育目標・方法との関連で、自分の教育目標・方法を位置づけるということであろう。そうすることによって、自分の教育目標・方法の特徴がより一層はっきりし、どこに重点が置かれているのか、何が不足しているかを、他教官との関連で捉えることが可能になるであろう。このようにして自分の教育目標・方法を明確に意識することは、今後、講義計画を立案したり、授業評価を行う際の一つの指針とすることができるであろう。

しかし、本調査は、まだ未熟な点の多い探索的なものであり、不足している部分や、今後改善すべき点が多々ある。例えば選択肢は、今回は筆者を含めた数人の教官によって挙げられたものであるため、あまり組織的・網羅的な内容とはなっていない可能性がある。今後は、今回のクラスター分析の結果や各人の教育目標・方法との関連で、もっと妥当なものにする必要がある。また、今回は全国各大学の教養教育担当の心理学教官が対

象であったが、今後は教官だけではなく、心理学を受講する学生の意識を聞くことによって、学生が心理学の授業に何を望んでいるか、また教官－学生間でずれが生じていないかどうかを検証することが可能であろう。あるいは、講義終了後の学生の意識を調査し、それを教員の意識と対比させることにより、1学期間の心理学教育の効果や弱点を知ることが可能となるであろう。こちらは、教官各々についての心理学教育の自己点検、ということになるであろうか。また、心理学だけではなく、他分野の教養教育担当教官の意識と対比させることによって、大学の教養教育全体の中での心理学教育の位置づけを明らかにすることも可能であろう。そうすることにより、教養教育における心理学教育の特徴や必要性・重要性を、より一層明確に位置づけていくことができるのではないだろうか。

謝 辞

1. 本報告で用いた調査の実施に協力して下さった、全国の教養教育担当心理学教官の皆さんに深く感謝いたします。
2. 本報告で用いた調査用紙を作成するにあたり、有益なご示唆を下さった、大阪学院短期大学の谷口高士先生、兵庫教育大学の宮元博章先生に深く感謝いたします。

3. 本報告の作成にあたり、有益なご示唆を下さった、高松短期大学の坪田雄二先生、沖縄国際大学の前堂志乃先生に深く感謝いたします。

引用文献

- 天野郁夫 1995 教育改革のゆくえ 自由化と個性化を求めて 東京大学出版会
- 大学審議会 1991 大学教育の改善について (答申) (日本教育年鑑刊行委員会(1992)による)
- 文部省(編) 1996 我が国の文教施策 新しい大学像を求めて 一進む高等教育の改革 大蔵省印刷局
- 米谷 淳 1995 授業改善に関する実践的研究 1. 心理学一般教育におけるメディアの活用 神戸大学大学教育研究センター, 3, 43-58.
- 日本教育年鑑刊行委員会 1992 日本教育年鑑1992年版 ぎょうせい
- 佐藤浩一 1993 何を伝えるのか、何が伝わるのか 若き認知心理学者の会(著) 認知心理学者 教育を語る 北大路書房, Pp.18-27.
- 吉村順子・吉村浩一 1994 心理学教育における新しい方法論の展開 telos (金沢経済大学人間科学研究所), 13, 1-53.